

ディスコグラフィー掲載

ディスコグラフィー【2019No.130】(HP 掲載)

分類：SACD/CD

作曲家：シューベルト

曲名：弦楽四重奏曲第14番ニ短調『死と乙女』他

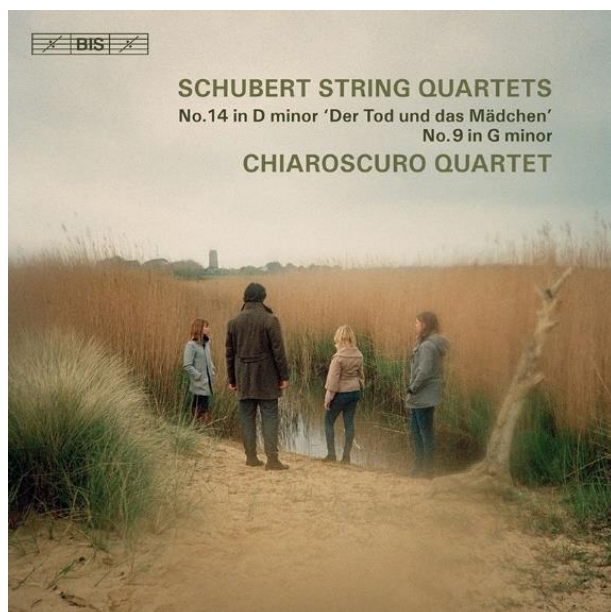
演奏：キアロスクーロ四重奏団

発売：King Records

No.：KKC-5996

概要：

キアロスクーロ四重奏団の演奏会で求めたものです。



収録曲：

シューベルト 弦楽四重奏曲第14番ニ短調 D.810『死と乙女』

弦楽四重奏曲第9番ト短調 D.173

演奏：キアロスクーロ四重奏団

アリーナ・イブラギモヴァ (第1 ヴァイオリン)

パブロ・エルナン・ベネディ (第2 ヴァイオリン)

エミリー・ヘルンルンド (ヴィオラ)

クレア・ティリオン (チェロ)

録音日：2017年3月

録音場所：ケルン、ドイッチュラントフンク・カンマームジークザール

輸入元情報によれば、本 CD の概要は次のとおりです。

「イブラギモヴァ率いるキアロスクーロ四重奏団によるシューベルトの『死と乙女』！

SACD ハイブリッド盤。今をときめくヴァイオリニスト、アリーナ・イブラギモヴァ率いるキアロスクーロ四重奏団。BIS レーベルからリリースしているハイドンの弦楽四重奏曲第 31～33 番、第 34～36 番が高く評価される中、期待の新譜はシューベルトの弦楽四重奏曲第 14 番『死と乙女』と第 9 番です。古典派と初期ロマン派のレパートリーに特化して当団の期待の高まる録音です。

1815 年作曲の第 9 番ト短調。同年、歌曲、教会音楽、ピアノ・ソナタなど多数の作品を残した実りの年でした。ハイドン、モーツァルトの影響が見受けられるものの、シューベルトの個性も明確になりつつある作品で、本格的な短調の作品はこれが最初となります。

そして、シューベルトの傑作の一つである第 14 番ニ短調『死と乙女』。第 2 楽章に歌曲『死と乙女』Op.7-3 (D.531) のピアノ伴奏部を借用したのでこの通称を持ちます。全体を通じ、ロマン的な情趣に満ちており、ことに第 1 楽章の主題のもつインパクトと悲愁が印象的です。

2005 年に当時英国王立音楽大学 (RCM) で学んでいた友人を中心に結成し、近年アンサンブルが成熟してきたキアロスクーロ四重奏団。団体名の「Chiaroscuro (キアロスクーロ)」は美術用語で、コントラストを印象づける明暗法や陰影法を意味しますが、その名の通りシューベルトの溢れる魅力を再発見させてくれているような見事な解釈を披露しております。」

[ディスコグラフィ\(2019No.128\)](#)では、アルバンベルク四重奏団の『死と乙女』について紹介していますが、アルバンベルクの方は、ある時は、激情的で緊張感溢れるスリリングな演奏を、ある時は切なく悩ましい表情を、またある時は優しく穏やかな表情が次々と入れ替わって飽きさせない、巧みな演奏が聴きどころです。

これに対し、キアロスクーロの方は、よりダイナミックに若いエネルギーをぶっつけるようなアグレッシブな演奏です。アルバンベルクの方が、よりオーソドックスと言えますが、キアロスクーロの現代的な演奏もあってもいいのではないかと思います。弦楽四重奏曲第 9 番ト短調の方も同様の印象です。

以上